

2019-20 年度レギュラーコースカリキュラム報告 —アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—

佐藤 有理

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、1) 10 カ月間にわたるレギュラーコース、2) 夏期集中コースの二種類の集中日本語教育が行われた。本稿は、1) の 10 カ月間にわたるレギュラーコースについて報告するものであり、2) については結城ほか(2020)を参照されたい。レギュラーコースの期間は、2019年9月2日から、2020年6月5日までの40週間で、学生数は59名(うち博士課程16名、修士課程24名、その他19名)で、教員は常勤教員9名、非常勤教員8名で指導にあたった。

2 レギュラーコースの概要と今年度の特殊事情

40週間のレギュラーコースは4学期に分かれ、各学期の間には休みがある。今年度は、1学期は、9月2日から10月25日までの8週間、2学期は11月5日から12月20日の7週間、3学期は1月14日から3月6日までの8週間、4学期は3月23日から6月5日までの11週間で実施された(表を参照)。1学期と2学期を「前期」、3学期と4学期を「後期」と呼んでいる。主に、前期は、日本語の構造や知識の習得に比重がおかれ、後期になるに従い、各学生の専門や関心領域に近い内容に焦点をあてた科目を選択することが可能になるという点に違いがある。また、午前の授業は、文法等の言語の形式面を重視するが、午後の授業は、聴解、読解、発話等の総合的な言語の運用力を高めることを目的としている。そのため、「前期」にあたる1学期の午前は「文法」「接続表現」、午後は「総合運用Ⅰ」という科目が設定され、2学期の午前は「待遇表現」「統合日本語Ⅰ」、午後は「総合運用Ⅱ」を実施した。ここまでは全学生共通である。後期にあたる3学期は、午前は「統合日本語Ⅱ」が共通であるが、「選択A」「選択B」、午後の「総合運用Ⅲ」は各学生が自分の関心領域に合わせて科目を選択することが可能である。さらに4学期の午前は3学期と同じコースが設定され、午後は「プロジェクトワーク/グループワーク/N1・N2クラス授業」のいずれか希望するものを一つ選択することができる。

通常は、1年を通し、午前は月曜日から金曜日までの10:00から11:50まで1コマ50分を2コマ(途中休憩10分)とし週に10コマ、午後は水曜を除く13:20から15:00まで1コマ50分を2コマとし週に8コマ授業が行われる。ただし、4学期午後のみ例外となる(6-2で詳述)。

しかし、本年度は、新型コロナウイルスによる世界的感染の拡大があり、4 学期からオンライン授業が実施されることとなった。そのため、3 学期の最後の週をオンライン授業準備にあてることとした。また、4 学期開始から1 週目と2 週目は通常の日本時間の授業時間帯で授業を実施したが、3 週目からは、米国に帰国した学生の時差に配慮し、全授業の終了時間を2 時間半早めるため、午前のクラスを8:30 開始とし、昼休みも1 時間短くした。オンラインへの移行に伴った対策や課題についての詳細は佐藤ほか (2020) を参照されたい。

表 2019-2020 年度 40 週間のレギュラーコース日程

週	10:00-11:50 午前クラス授業	13:20-15:00 午後クラス授業 水曜は午後のクラスなし	
1	オリエンテーション・試験・面談	オリエンテーション・面談など	↑
2			
3	文法		
4	Japanese Grammar		1学期
5		総合運用 I	9/2-10/25
6		Applied Japanese Skills I	8週間
7	接続表現		
8	Conjunctive Expressions		↓
9	秋休み 1 週間 10 月 26 日(土)~11 月 4 日(月)		
10	待遇表現		↑
11	Formal Expressions		
12	統合日本語 I	総合運用 II	2学期
13	IJ: Integrated Japanese	Applied Japanese Skills II	11/5-12/20
14	Advanced Course I		7週間
15			
16			↓
17-19	冬休み 3 週間 12 月 21 日(土)~1 月 13 日(月)		
20			↑
21			
22	統合	選択 A	3学期
23	日本語 II	Elective	1/14-3/6
24	IJ II	Course A	8週間
25		選択 B	
26			
27		個人面談	↓
28-29	春休み 2 週間 3 月 7 日(土)~3 月 22 日(日)		
30			↑

31	統合	選	選	プロジェクトワーク/ N1・N2クラス授業/個別指導 Project Work/N1・N2 Class	 4学期 3/23-6/5
32	日本語Ⅲ	択	択		
33	IJ III	A	B		
34					
35	GW 休み 1 週間 4 月 29 日(土)～5 月 6 日(水)				11 週間
36	統合	選択 A	B	プロジェクトワークなど	授業は実質 8週間
37	日本語Ⅲ				
38	IJ III				
39	試験5/25-26月火、発表準備			試験5/25-26月火、発表準備	
40	発表6/1-2月火、面談6/3-4水木			発表6/1-2月火、面談6/3-4水木	↓

3 1 学期の教育内容

午前には「文法」を5週間、その後の2週間は「接続表現」にあて、午後には「総合運用 I」を6週間実施した。

3-1 午前の内容

3-1-1 文法

入学直後の1学期午前では、中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい文法事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力を向上させた。市販教材『レベルアップ 日本語文法』（くろしお出版）、『Japanese Grammar』（本センター作成）、『An Introduction to Advanced Spoken Japanese』（本センター作成）のいずれかを、各クラスの日本語習熟度に応じて使用した。また、クラスによっては敬語とその随伴行動の学習準備として「プレ待遇表現（動画スキット全4回）」（本センター作成）を導入した。午前22日間44コマをこの指導にあてた。

3-1-2 接続表現

接続詞に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方（複段落の作成）について指導した。教材として『接続表現』（本センター作成）を用いた。午前7日間14コマをこの指導にあてた。本年度は振替休日や即位の礼が重なったため、昨年度より2日間、授業日数が少なかった。

3-2 午後の内容

3-2-1 総合運用 I

午後の授業「総合運用」は主として、読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、文字通り総合的な日本語運用力の向上を目指した。第1学期は身近で日常的な話題を扱った「経験談」という単元から開始し、自然な話し方に慣れるとともに、既習の文法事項などを総合的に活用する機会を提供した。続いて新聞やニュースを教材とする社会性をおびた単元に進み、日本事情や時事的話題に関する語彙・表現の習得と運用力向上を促した。今年度も読解スキルの強化を目的に、「毎日のスキル」を、各クラスで10分間程度を問題演習の時間にあてた。具体的には、日本語能力試験の過去の問題や対策問題を中心に、クラス裁量で1問選び解かせた。その後、解答の答え合わせの他に、文の構成や文法、表現に着目したフィードバックを行う活動を取り入れた。また、授業時間内に全学生を対象とした講演会を1回(11/29)、漢字の統一テスト(8-2参照)を1回実施した。午後18日間36コマをあてた。

4 2学期の教育内容

午前に「待遇表現」を2週間、その後「統合日本語I」を5週間、午後に「総合運用II」を7週間実施した。

4-1 午前の内容

4-1-1 待遇表現

最初の2週間は、円滑な人間関係を構築できるよう、敬語とその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を取り上げた。主教材として『新待遇表現』(本センター作成中)を用いた。この教材は、昨年度初めて使用したものだが、今年度は、昨年度の使用で得られた知見を基にして全面的に見直しを行った。この待遇表現の指導に午前9日間18コマをあてた。

4-1-2 統合日本語 I

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、『統合日本語 *Integrated Japanese Advanced Course*』(本センター作成)を用いた。各課は同一の話題をめぐる「文章編」と「会話編」からなり、「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した。2分冊の上巻第1～3課を2学期に、下巻第4～5課を3学期に扱った(5-1-

1「統合日本語Ⅱ」参照)。午前 24 日間 48 コマを統合日本語Ⅰの指導にあてた。このうち 12/18 の午前 2 時間をミニ発表会にあて「統合日本語Ⅰ」で学んだ知識や技能を整理する機会とした。

4-2 午後の内容

4-2-1 総合運用Ⅱ

現代社会の問題をめぐる生の教材、例えば新聞・雑誌記事や報道番組などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、類似した一般的な話題についても日本人と話し合える能力獲得を目指した。この総合運用Ⅱでは、話題シラバスのモジュール型教材群「外国人と国籍」「文化の発信」「ものづくり」「教育」「現代の若者たち」「働く女性」「地球環境」「差別と人権」「情報化社会」の中から学生の興味や関心あるいは必要性に応じて教材を選び、各クラスの理解度に合わせて授業進度を調整した。ただし、「外国人と国籍」に関しては全クラス必修とした。また、総合運用Ⅰに引き続き、読解スキル強化を目的とした「毎日のスキル」を 10 分間程度取り入れた。午後 26 日間 52 コマを総合運用Ⅱの学習指導にあてた。このうち、授業内で、漢字の統一テストも 2 回行われた。

5 3 学期の教育内容

冬休みが明けた 1 月から第 3 学期が始まり、この学期から、各学生の専門・興味・関心・必要性に応じた選択授業が増える。午前は、月曜と水曜に選択 A、火曜に選択 B、木曜と金曜に統合日本語Ⅱを、午後は総合運用Ⅲを実施した。また水曜午後と木曜放課後に随意科目の選択 C を設けた。ただし、本年度は、新型コロナウイルスの影響によりオンライン授業への移行が 3 学期の最終週にあたる 3 月 2 日に決定し、その日の午後からの授業時間を 4 学期のオンライン授業への準備期間としたため、3 月 3 日から 6 日までは、授業は行われなかった。

5-1 午前の内容

5-1-1 統合日本語Ⅱ

3 学期に全学生が共通の教材で学ぶ授業はこの「統合日本語Ⅱ」のみである。週 2 日『統合日本語 *Integrated Japanese Advanced Course*』（本センター作成）下巻を教材に実施した。3 学期最終週の授業 2 日間にミニ発表会にあて「統合日本語Ⅱ」で学んだ知識や技能を整理する機会とすることを予定していた。しかし、今年度の特殊な事情により、この発表会は 4 学期の 4 月 24 日（金）に Zoom を利用したオンラインにて実施された。実施の詳細は佐

藤ほか (2020) を参照されたい。3 学期の木曜と金曜の午前 14 日間 28 コマ実施した。

5-1-2 選択 A

3～4 学期の午前週 2 回、各学生は、自己の専門領域に関連するコースを 1 つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する言語面の能力育成に取り組んだ。学生には 3～4 学期を通じて同じコースを継続履修するよう奨励した。例年、コース選択に迷う学生がいるため、「選択 A コースお試しクラス」と称して 2 学期の授業内午後 1 日 (11/19) を利用して体験受講の機会を設けた。本年度の開設コースは「文化人類学」「政治経済」「文学」「歴史」「法律」「日本学概論」の 6 コースとした。月曜と水曜の午前に 3 学期に 13 日間 26 コマ、4 学期にはオンライン上で 15 日間 30 コマをあてた。

・文化人類学

本年度は人数が多かったため、2 クラスに分けて実施した。3 学期は「言語とジェンダー」「伝統文化と記憶」「テクノロジーとグローバル化」をテーマに設定し、具体的な事象から抽象的課題に至る専門性の高い読み物を教材とした。予定していた校外学習は、オンライン授業への移行準備と重なり、中止となった。4 学期は各学生が自己のテーマにそった素材を提供し話し合いを進めた。「舞踊と身体」「現代タトゥー論」「役割語」「ゲーミフィケーション」「公共ツーリズム」「オノマトペ」「マインドフルネス」「母系社会と権力」「和菓子」「震災後における社会の変容」「特別支援教育に関する制度や課題」等がテーマとしてあげられた。

・政治経済

3 学期は大学生向けの教科書を読み、日本政治や政治学に対する理解を深めた。クラスでは読み物の内容確認、単語クイズ、議論などを行い、専門用語の定着を図った。また、毎回の授業で政治のニュースを取り上げ、理論と実社会とのつながりを考えさせたり、政治の問題を自分の問題として意識させたりした。4 学期は学生の意見を取り入れ「国際政治」「安全保障」「領土問題」などのテーマを扱った。また、オンラインで NGO 職員とセンター学生との交流会を設定し、「日本の若者の政治意識」などについて話し合った。なお、例年行われている国会議事堂、弾劾裁判所などの見学等の活動については、本年度は中止した。

・文学

明治から現代までの短編小説および関連する評論を取り上げ、様々な観点から作品を分析し、話し合いを行った。おおむね 2～3 回の授業で 1 作品を読んだ。

・歴史

日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ね、語彙・表現の拡充を図った。3 学期から 4 学期前半は学生の興味・関心・必要性に応じて、専門書および一次史料を素材とする読解練習を行った。4 学期後半は、各学生が自分の研究テーマに関する資料を選び、2 時間の授業を構成する取り組みを行った。例年行っている横浜市中央図書館、国会図書館等の見学は、本年度は中止した。

・法律

憲法、民法を中心に、刑法、知財法、会社法の一部を取り上げ、条文・判例を自力で理解できる技能を育成することで、法律に関わる話題について自ら調べ、それを説明し、自説を展開できるよう指導した。なお、例年行われている日本大学法学部大学院のゼミ聴講、裁判所・検察庁見学等の活動については、オンライン化に伴い、本年度は中止した。

・日本学概論

専門が定まっていない学生、幅広い分野で活かせる日本語力を追及したい学生などを対象に設けられた選択科目である。選択 A の分野を中心に日本研究や日本についての多種多様な教材を用い、知識を蓄え、理解を深めたのち、互いに話し合うことで日本語力の定着を図った。

5-1-3 選択 B

選択 B では必要とされる、あるいは弱点と思われる日本語力の増強のために、「話す（議論、発音）」「読む（精読）」「職場の日本語」の 3 コースを開講した。今年度は、コース内でレベル別クラスを作る目的で、選択のコース数を狭めた。そのため、3 学期と 4 学期の全ての選択肢を提示し、学生が計画性をもってコースを選択できるようにした。この際、3 学期に「聴く」も選択肢として提供したが、希望者が少なかったため不成立となった。3 学期は水曜の午前 7 日間 14 コマをあてた。

・話す

3 学期は 4 クラスで行われた。議論クラス、議論の構成とイントネーションを中心に行ったクラス、イントネーションとロールプレーを中心に行ったクラス、日常会話と聴解のクラスがあった。4 学期は 2 クラスで行われ、日常会話クラスと、日常会話と発音を中心に行ったクラスがあった。

・読む（精読）

300～400 字程度の短めの文章（毎回 3～4 編程度）を素材として、そこに書いてある内

容を詳しく正確に読み取る練習を積み重ねた。授業では、一文一文の正確な理解から、文と文の関係の理解へと進んだ。また、理解を深める目的で、音読の活動も積極的に取り入れた。

・職場の日本語

ビジネス場面での待遇表現の位置づけで、さまざまな状況における会話練習を行った。また、ビジネス上のコミュニケーション問題の事例を読み、問題の所在、解決方法について考え、ディスカッションを行った。

5-2 午後の内容

3学期の午後は「総合運用Ⅲ」とし、「現代史」「大衆文化」「ビジネス・社会」の3つの中から1コースを選択する。どのコースも、読み物を理解したりビデオを視聴したり、さらにその話題について討論をするなどの諸活動が盛り込まれている。午後24日間48コマを総合Ⅲの学習指導にあてた。そのうち、漢字統一テストが2回(1/20、2/17)、全学生を対象とした映画鑑賞とトークショーが2回(2/18、2/21)授業内で行われた。

5-2-1 総合運用Ⅲ

・現代史

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の歴史を、「戦前の日本 1900-45」「敗戦と復興 1945-55」「高度成長 1955-70」「現代の日本 1970-95」の4期に分け、ビデオと読み物で概観した。また、1995年以降の現代日本について、各学生が興味を持ったテーマで発表を行った。

・大衆文化

広い意味での日本の“大衆文化”に関して日本人と話せるようになることを目標とした。「CM」「マンガと教育」「映画とオタク」「言葉と音楽」というテーマで資料を読み、話し合った。また、コース最後には、「これって文化」というテーマで学生各自が発表した。

・ビジネス・社会

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「バブル前と後」「創業者と起業家」「アベノミクス」「SDGs」などの話題を取り上げた。

5-2-2 選択 C

3・4 学期の随意選択科目として「文語文法」「漢文」「ビジネス」の3コースを開設した。このうち「ビジネス」は外部から招いた専門家が指導に当たった。

・文語文法

文語文法の用語や歴史的仮名遣いから導入し、動詞・形容詞・助動詞の指導に進み、文語作品の部分的読解も並行して行った。水曜日の授業後に開講した。

・漢文

日本人が書いた漢文や漢文体の素材を取り上げ、読み下しと解釈の練習を行った。まず漢文の基礎構文をおさえ、それを応用して短い文章を読んだ。水曜日の授業後に開講した。本年度は、オンライン授業移行のため、4 学期はプロジェクトワークの中で個別に指導することにし、クラス授業は行わなかった。

・ビジネス

「日本の産業と金融」を主題に、新聞や雑誌の記事を素材として、ビジネス界の実情にも触れながら、日本経済の現在に至る経緯を紹介し、今後の展望と課題について講義した。選択 B「就活の日本語」と連携する形で、模擬就職面接を実施した。(6-1-3「ビジネス日本語」参照) 3 学期は毎週木曜日の 15 時 15 分～16 時 15 分、4 学期は毎週水曜日に、元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が指導に当たった。

6 4 学期の教育内容

プログラム最後の 4 学期の「午前」は、3 学期午前と同様の形態をとる。今年度は、月曜と水曜は「選択 A」、火曜は「選択 B」、木曜と金曜は「統合日本語Ⅲ」とした。「選択 A」は同じ分野を 3 学期から継続履修するが、「選択 B」は「話す」のみコースの選択肢として継続し、「書く」「就活の日本と」「現代小説」「日本文化論」を加えた。また、4 学期の「午後」は「プロジェクトワーク」「グループワーク」「日本語能力試験 N1・N2 クラス」のいずれか 1 つの学習形態を選択し学習を進めた。

しかし、本年度は、本学期よりオンライン会議ツール Zoom を用いたオンライン授業へと移行したため、最初の 1 週間は「試行期間」とした。また、今学期の「午前」や「午後」は便宜上そのように呼称するが、実際は、授業の開始時間を早めたことに伴い、「午前」は 8:30～10:20 までの 2 コマで、「午後」は 10:50～12:30 であった。(詳細は佐藤ほか(2020))

6-1 午前の内容

6-1-1 統合日本語Ⅲ

4学期の木曜と金曜の2日間は、日本語のおもに形式面の補強・拡充・総仕上げを目指した。各クラスで、学生の到達度、興味、要望に応じて各種の教材を選択・補足し、内容に関連した発話活動などを通じて、既習事項を総ざらいし日本語の知識をより確実なものにするとともに、上級日本語話者が知っておくべき事項の欠落箇所を補うなどした。16日間32コマをあてた。授業内外で漢字統一テストを2回実施した。

6-1-2 選択A

3学期と同じ分野を継続履修する。15日間30コマをあてた。(5-1-2参照)

6-1-3 選択B

4学期の火曜は3学期と同内容の「話す」に加え、「書く」「就活の日本語」「日本文化論」「現代小説」の5コースを開設した。3学期同様日本語力の増強を図ることも可能であるし、また、まとまった内容のものを読むという目的で「日本文化論」「現代小説」を選択することもできる。8日間16コマをあてた。(3学期と同内容の「話す」コースについては5-1-3参照)。

・書く

随筆から小論文まで、目的に合った幅広い文章表現力の習得を目的とした。毎週、宿題として各種の文章を書き、授業ではそれを全員で検討・批判しあい、日本語らしい文章の書き方と推敲の技術について考察した。

・就活の日本語

就職活動を考えている学生を対象とし、面接練習、メールの課題提出などを通して、事例に即した解説を加えながら実践指導をした。今年度はオンライン面接を想定した。また、選択Cの「ビジネス」と連携し、模擬就職面接を行った。(5-2-2「選択C ビジネス」参照)

・日本文化論

青木保著『日本文化論の変容』を素材とし、各学生が担当箇所を分担した。担当者は事前にレジメを作成し、発表と話し合いを行った。本文で著者が引用した文献を追加資料として配付し、十分な内容理解を目指した。

・現代小説

現代作家による短編小説を毎週1作品ずつ取り上げた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、向田邦子、宮部みゆき、小川洋子、本谷有希子、江戸川乱歩の短編を扱った。

6-2 午後の内容

4学期の午後は「プロジェクトワーク」「グループワーク」「日本語能力試験 N1・N2 クラス」のいずれかの学習形態を選択して学習を進めた。

・プロジェクトワーク

プロジェクトワークでは、各学生が個人またはグループで自己の専門や興味ある分野の主題を選び、その内容に比較的詳しい教員から個別の助言を受けながら、調査研究や文献の読解などを行った。今年度は4グループ（合計9名）と個人27名の学生が選択した。テーマに関しては、卒業発表会の内容と重なる部分が多いので、そちらを参照されたい（7卒業発表会を参照）。学生1人につき午後8日間8コマを指導にあてた。

・グループワーク

特定の日本語課題に対して関心と同じくする者が、2～3名程度のグループを構成し学習をした。グループワークを選択したのは2グループ6名で、発音や聴解を中心に学習した。

・日本語能力試験 N1・N2 クラス

日本語能力試験 N1・N2 レベルの文型や語彙の習得を目指して、1回2コマのクラス授業を週に2回、16日間32コマ行った。市販の問題集を使用して知識増強を図り、語彙クイズ、復習クイズ、模擬試験を行った。

7 卒業発表会

卒業発表会は10カ月間にわたる学習の集大成となる催しである。例年は、全学生が、来賓と全教職員・学生の前で、質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、やや改まった形式の発表をする。しかし、今年度は、特殊な事情により、オンライン開催となり、かつ米国東海岸との時差を考慮したため、3セクションで2日間かけて実施した。（詳細は佐藤ほか(2020)）

4学期の午後の授業がプロジェクトワークの学生は、その時間内に卒業発表の準備を進めた。グループワーク及び日本語能力試験 N1・N2 クラスの学生はミニ発表会（2・3学期の「統合日本語」）などで話した内容を洗練させるなどして卒業発表に仕上げ、1人2コマ

分、原稿のチェックと発表の予行演習を個別指導する教員を割り当てた。

本センターのウェブサイト「卒業発表会内容紹介」ページでは過去の年度も含め、題目と要旨を公開しているので参照されたい。https://www.iucjapan.org/html/presentations_j.html

8 通年で実施した学習指導と行事など

8-1 評価

8-1-1 テスト

本プログラムでの学習成果を測定するため、入学直後と卒業時に実力試験を実施した。読解、聴解、漢字の試験、面接形式での発話テストを、入学・卒業時に共通して実施し、入学時にのみ文法と作文のテストを加えた。作文は、辞書を持ち込み可とし1時間以内にその場で書かせた。ただし、今年度の卒業時の試験はすべてオンラインで実施した。実施の詳細は佐藤ほか (2020) を参照されたい。

また、年度途中での伸びや弱点の確認の目的で、10ヵ月コースの半分にあたる2学期の終わりの授業内に、漢字、読解、聴解の全問マークシートの実力テストを実施した。

8-1-2 個人面談

試験結果をもとに1学期のクラス(午前・午後各8組)を編成するとともに、午前のクラス担任教師は、コース開始に先立ち、午前クラスで受け持つ各学生と個別に面談し、試験の結果を踏まえ40週にわたる学習の指針などを助言した。1学期末にも午前のクラス担任と各学生とが個別に面談し、その間の学習ぶりを振り返り、新たな課題を設定するなどした。

このような教師と学生の個人面談の機会はその後も各学期末に設けている。1学期から3学期に至る学期末はそれぞれ午前のクラス担任が面談を行った。最終学期にあたる4学期は、入学時の担任が面談を行い、10ヵ月の学習を振り返った。なお、3学期と4学期はオンライン上で実施された。

クラスは学期ごとに午前・午後とも必要性を考慮した上で可能な限り編成替えをし、新鮮な気持ちで学習に臨める雰囲気維持を図った。ただし、「統合日本語Ⅱ」(5-1-1)と「統合日本語Ⅲ」(6-1-1)は、クラス毎の連続性を重視し、クラスを変更しなかった。

8-2 漢字プログラム

プログラム期間を通じて、常用漢字習得のための自律学習プログラムを実施している。教材として本センター編集発行の市販教材『*Kanji in Context*』『*Kanji in Context Work Book vol. 1・2*』(ジャパントイムズ社)を用いる。これは漢字を単独ではなく、熟語や例文と共

に学習できる内容構成となっており、学生は常用漢字すべてを卒業までに習得できるよう、毎日教材を独習し、授業以外の時間にクイズ 156 回を受けることとなっている。さらに漢字学習を促すため、Web アプリケーション「WebKIC」が作成されており、学生は自分の進度に合わせて、漢字習熟度を確認することができる。また、これを利用して「KIC 統一試験」を作成し、実施している。

統一試験は、漢字の書き方、読み方等を答えるという問題 100 問を全学生が受け、点数が 6 割未満の場合は再試験を受けなければならない。今年度は、従来通り毎学期 1～2 回、計 7 回授業内で実施した。

また、統一試験前に希望者に対し漢字の書字指導を行った。漢字クイズ採点者が試験範囲の漢字を中心に、よく学生が書き間違えるポイントを示しながら指導した。字形への認識が高まったなど好評であった。

8-3 講演会、校外学習、各種の企画や催し

全学生を対象とする講演会を 3 回 (11/15、11/29、2/21)、全学生が参加する校外学習を 2 回 (10/4、2/14) 開催した。また、選択必修コース授業の一環としてコースで独自に実地見学におもむくなど様々な学習機会を設けた。各種の催しは実施順に本稿末の資料に一覧としてまとめた。この表には、本センターが主催した行事だけでなく、相手方の団体から招待を受けて本センターが学生に参加を呼びかけた催事も記載した。

以上の催し以外に、希望学生を対象とした課外活動「書道」「古筆」「茶道クラブ」を設けた。「書道」「古筆」のコースは書家の小林紘子氏が担当した。「書道」は年間を通じて週に 1 回授業後に実施し、「古筆」は 3 学期のみ書道終了後に実施した。「書道」のコースは、書の心得や筆の運び方などの基本から伝授し、最終的には自作の落款付き作品を仕上げ、掛け軸に表装したものを卒業発表会場に展示するが、本年度はオンライン授業へと移行したことにより、4 学期は実施しなかった。「古筆」は、手書きの古典文献を理解するのに欠かせない「くずし字」の読解練習を段階的に進めた。本来、4 学期まで継続する予定だったが、オンライン授業移行により、4 学期は実施しなかった。

「茶道クラブ」は初心者向けの裏千家学校茶道で、3 学期に設けた。専任講師資格を有する本センター講師が担当した。真・行・草の札に始まり、畳の歩き方、床の拝見の仕方、割り稽古と進み、点前の習得を目指した。また、茶席では、茶道に関連した軸、花、茶碗、歴史などについて説明した。

9 おわりに

微細ながら今年度に新たに取り組んだこともここでまとめておく。カリキュラムに直接関係することとしては、「発表会の評価シート」の試用と選択 B の在り方についての二点

がある。

まず、「発表会の評価シート」については、本センターでは「発表会」が2学期以降、毎学期末に行われ、カリキュラムの中でも重視されているため、学生が発表をする際の指針となるような評価シートを作成し、2学期にそのシートを用いた評価を試みた。そして、そのシートを3学期の発表でも継続して用いる予定であったが、今年度の特殊事情により、4学期後半に延期させる中で、その評価の継続が難しくなった（詳細は佐藤ほか (2020)）。しかし、この評価シートも改善の余地があるため、今後は検討していくことが求められる。

次に、3、4学期の選択Bの在り方を変更した。具体的には、各学期の選択肢の数を限定することで、学生が希望したが希望者が少なくクラスが開講されないという事態を避けること、コース内でのレベル別が可能になること、を目指した。そのため、各学期のコース数を減らした上で、3学期の時点で4学期の見通しも併せて Google Forms を通じて希望を聞き、4学期に再度変更したい人は希望を聞くということにした。こうしたアンケートのオンライン化に伴い、昨年度の外部評価で指摘されていた紙の使用も削減した。

以上の二点は、カリキュラム検討委員での話し合いに基づき、全体の会議にかけた上で実施された。今年度のカリキュラム検討委員会は、9月から2月までの毎月一回、様々な事柄が検討された。検討内容として出された議題は、選択Bの希望の取り方、ASJの改訂の可能性、入学審査のスピーキングテストの在り方、支援の必要な学生へのサポートの在り方、LMS（学習管理システム）、発表評価シート、学生のニーズ調査等である。

また、オンラインに移行せざるを得なかったという事情があったにせよ、最後のプロファイシエンシーテストはすべてオンライン上で行えるような形状になった。

未曾有のコロナ禍において、学生の安全をどのように確保し、どのような支援が可能かを模索しているうちに今年度の幕を閉じることになってしまったという感が否めない。学生は、出身国を離れ、世界から届くニュースをどのような思いで受け止めながら授業に参加していたのであろうか。教職員も、2011年の東日本大震災でオンライン授業への移行は経験していたものの、先行きの見えない状態に不安を抱くことがなかったとは言い切れない。そのような状況下においても、心が折れずに日本語の学習を続けてくれた学生の皆さんと、それをなんとか支えようと全教職員が全力を傾注したことに、敬意を表したい。IUCのカリキュラムは、そのような強固な協力体制のもとに成り立っていることを痛感させられる一年であった。

(さとう あり/IUC レギュラーコース言語課程主任)

参考文献

秋澤委太郎 (2020) 「日本研究センターレギュラーコース 2019-20 年度春学期におけるオンライン教育体制の技術的側面—Zoom、G Suite for Education、Remo、Slack、Timify.me

一」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第9号 pp. 47-63

< https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_Akizawa.pdf >

佐藤有理・佐藤つかさ・小峰克之・秋澤委太郎・結城佐織・青木惣一・大橋真貴子・橋本佳子・千田昭予 (2020)「遠隔教育による上級日本語教育実践報告—ICTを活用したオンライン授業移行への対応と課題—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第9号 pp. 1-21

< https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_SatoAri_et_al.pdf >

結城佐織・千田昭予・本間光徳・川西由美子・白石恵利奈・小峰克之・橋本佳子「2019-20年度 夏期コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第9号 pp. 80-102

< https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_Yuki_et_al.pdf >

【資料】2019-20年度 通常授業以外の各種イベント

2019年

- | | |
|-----------|---|
| 9月8日(日) | 国立能楽堂 能・狂言 |
| 9月9日(月) | 防災説明会 避難訓練 |
| 9月13日(金) | 入学歓迎親睦会 |
| 9月17日(火) | 政治家 自見はなこ氏パーティ 東京プリンスホテル |
| 9月28日(土) | 矢来能楽堂 円満井会定例会 |
| 10月4日(金) | 校外学習 日米協会 アメリカ研究者の集い／三溪園、八聖殿 |
| 10月6日(日) | 鶴岡八幡宮 流鏝馬 |
| 10月6日(日) | 国立能楽堂 能・狂言 |
| 10月14日(月) | 関内小ホール 立川晴の輔定期落語 |
| 10月18日(金) | Ambassador Robert M. Orr, Ph.D.講演会 |
| 10月19日(土) | 研究ネットワーク(領域越境研究会)主催 江戸の歴史ツアー |
| 11月3日(日) | 横浜市立大学学園祭「浜大祭2019」 |
| 11月10日(日) | 国立能楽堂 能・狂言 |
| 11月15日(金) | IUC レクチャー・シリーズ
スーザン・J・ネイピア氏(IUC1975年卒業生)
「宮崎駿の世界—闇の中の光」 |
| 11月17日(日) | 鶴岡八幡宮 お茶ワークショップ |
| 11月24日(日) | 横浜かもんやま能・狂言 |
| 11月27日(水) | カウンセリング説明会(TELL JAPAN) |

- 11月29日(金) 一般社団法人日米協会副会長 久野明子氏 講演会
「太平洋を越えた日米女性の誓い：大山捨松・津田梅子・アリス・ベーコン」
- 12月4日(水) 能ワークショップ
- 12月11日(水) 文楽鑑賞教室
- 12月13日(金) YOKE 地球市民講座 IUC 紹介と交流会
- 12月16日(月) 鶴岡八幡宮 御神楽

2020年

- 1月26日(月) 国立能楽堂 能と狂言
- 1月31日(金) フルブライト事務局サスマン氏交流会
- 2月3日(月) 巖島神社 節分
- 2月5日(水) 日本財団奨学金受給生前期発表会
- 2月12日(水) 救命救急講習会
- 2月14日(金) 大倉山記念館「第10回大倉山国際学生フォーラム横浜2020」
- 2月21日(金) 映画「おクジラさま」トークショー
杉岡大樹氏・ジェイ・アラバスター氏
- 2月21日(金) FSI Yokohama (米国国務省日本語研修所) 座談会
- 2月23日(日) 高橋きよ子ディナーショー

以下は全てオンライン開催

- 3月24日(火) 就職活動セミナー 飯田友希氏
(一般社団法人日本国際化推進協会)
- 4月10日(金) 会社説明会 本多尚諒氏
(株式会社テンナイン・コミュニケーション)
- 5月27日(水) 日本財団奨学金受給生後期発表会
- 6月3日(水) 会社説明会 本多尚諒氏
(株式会社テンナイン・コミュニケーション)
- 6月4日(木) 会社説明会 平山千紗氏・ハリス・ジェフリー氏
(株式会社コスモスホテルマネジメント)